

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：23101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02068

研究課題名(和文) ハーム・リダクションと薬物依存者への社会的ケア：東アジアへの影響、移入、展開

研究課題名(英文) The harm reduction approach in the East Asia: its influence, adoption and development to the existing social care systems for PUDs (persons who use drugs)

研究代表者

徐 淑子 (Suh, Sookja)

新潟県立看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：40304430

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ハーム・リダクション(危害低減)は1980年代に創始された薬物使用者支援アプローチである。このアプローチの、日本を含む東アジア地域での受け入れとローカライゼーションについてドキュメント分析および訪問調査にもとづき明らかにした。その結果、それぞれの国・地域で、国際機関等によって提案される「標準的」実践だけでなく、薬物問題単体ではない複数の保健医療福祉的課題を統合するプログラムを画策する傾向が示唆された。日本では、医療内実践の中にハームリダクションを統合する動きが注目された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究でとりあつかうハームリダクション・アプローチは、日本では、その存在は知られているが医療および公衆衛生実践において、公式的には取り入れられていない。また、薬物問題の規模の大きな国の対策というイメージもある。本研究では、薬物をめぐる社会的価値、法制度や、薬物問題の傾向が日本と近似するアジアの国々との比較を行った。研究をとおして情報の環流を行い、ハームリダクションやその他の薬物対策、薬物使用者支援のあり方についての社会的議論、ことに治療やケアのオプションを拡大することについての基礎資料および視点を提供した。

研究成果の概要(英文)：Harm reduction is an approach for help drug users to protect their health that dates back in 1980's Europe. How was the idea of harm reduction introduced and accepted to Japan and other Asian countries? This study investigated the acceptance and localization of this approach in the East Asian region, including Japan, focusing on the process of "translative adaptation". For this purpose, we conducted field survey in Japan and several Asian and European countries. In each country, integrative programs are likely to be appreciated rather than single issue intervention program. In Japan, there has been notable attention to integrating harm reduction within medical practices.

研究分野：健康社会学

キーワード：ハームリダクション 薬物使用者支援 HIV/AIDS 東アジア 翻訳的適応

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ハーム・リダクションとは、1980年代のヨーロッパに始まった、薬物使用(依存)者支援アプローチである。「危害低減」を意味し、個人の健康リスク行動(例えば、麻薬の摂取)を完全排除することより先に、目前にある健康被害(例:麻薬注射の回し打ちによるHIVや肝炎ウイルスへの感染)を重視し、それをできる限り少なくすることを介入目標とする施策のあり方を指す。

このアプローチの有効性は、HIV感染率の低下、薬物関連死の減少、依存症者の年間医療費の減少、薬物依存者の受療行動の増加など数々の指標によって確かめられている。また、採用国の多くで、依存症の問題をもつホームレス者の対策拡充、刑務所での矯正治療の縮小につながる等、社会的影響の範囲も広い。その結果、現在では、2016年の国連薬物問題特別総会でも支持される薬物対策のグローバル・スタンダードとなった。

ところが、日本や韓国のように、その導入に消極的な姿勢を見せる少数の国があり、中国やヴェトナム、台湾のように、施策導入はされているものの、その後の拡がりに勢いのない国がある。そして、他方、日本では、薬物対策としてのハーム・リダクションは広がっていないが、喫煙対策やアルコール依存症の治療などで、ハーム・リダクションの考え方が取り入れられつつある。

このような、取捨選択の違いはどこからくるのか。これらのことがらを背景に、本研究課題の構想を得た。

2. 研究の目的

本研究は、ハーム・リダクション・アプローチの、日本を含む、東アジア地域での受け入れとローカライゼーションの状況について、多種多様な情報源の収集と分析によって、明らかにするものである。東アジアでの状況を検討する際、ハーム・リダクションの早期採用地域である欧州(オランダ等)を参照事例とした。研究結果を、日本を含む東アジアにおける、依存症ケアや薬物対策へのオプションを増やすための議論の活性化に資することとした。

3. 研究の方法

研究は、以下の活動の複合として行った。研究活動は、研究代表者と研究分担者がそれぞれ十分に担当した。資料・文献の精査による制度論的比較。文献、国内外の学会・実践者会議への参加、およびオンライン上の情報の収集。の情報に基づく、対象フィールド地における事例の収集。実践プログラムおよび実践者の訪問による資料収集とインタビュー。収集した情報にもとづくドキュメント分析。

当初の研究期間後半にCOVID-19の世界的流行が始まり、予定していた現地訪問調査が遂行できなくなり、インターネット上の資料やオンライン会合によるデータ収集方法に変更、活用した。

4. 研究成果

1) 2018年度から2022年度までの間に、文献・資料調査の他、研究代表者・徐および研究分担者・池田がそれぞれ分担して訪問調査を行った。訪問調査は2020年1月までの間に、日本国内、韓国、台湾、オランダ、ベルギー、ポーランド、2023年3月に後続科研の調査と併せてカンボジアで行った。それぞれの訪問地で行政、医療機関、NGO/CBO、当事者団体(のべ23ヶ所)を訪問し、情報提供を受けた。2020年3月の2回目の訪韓調査をコロナ流行により中止し、訪問予定者とオンライン会議により情報提供を受けた。

2) 研究分担者・池田は、韓国他、台湾など東アジア地域における薬物問題の歴史的経過についての基礎資料を整理し、ドキュメント・アーカイブを作成してその成果の一部をインターネット上で公開した。

3) 研究代表者・徐は、本研究の理論的フレームワークである「翻訳的適応」について、文化伝播理論、イノベーション伝播理論、グローバルイゼーションにおける文化変容の立場から整理した。1990年代以前の文化変容論はヒト・モノ・情報の世界的移動による文化接触による「均質化」（例えば、ジョージ・リッツアの「マクドナル化」理論とマックス・ウェーバー的合理化プロセスの進行）を強調している。近年の「グローバル」研究は、その点に不備を見だし、いわゆる「世界水準」というグローバル文化と、ローカル文化の双方向的な影響関係に焦点を当てている。「グローバル・スタンダード」による現行の実践への影響を、既存システムへの侵食（「文化伝播」つまり中心から周辺への広がり）ではなく、「グローカライゼーション（受け入れ側の選好と翻案加工を経た定着）」という一種の適応型と捉えることに注目するという特徴があった。

4) 調査で収集した情報を分析した結果、以下のことが明らかになった。HIV/AIDS 対策や薬物政策における「ハームリダクション」は、世界保健機関 WHO や国連薬物犯罪事務所 UNODC、Harm Reduction International などの国際 NGO とその下部組織によって公式的に定義づけられ、ガイドライン、ベストプラクティス手引き書、専門家研修等、普及に適したかたちでの、「標準化」された形態がある。その一方で、およそ 30 年の歴史をもつハームリダクションの発想を活かしながら、情報化の加速する状況に即した新たな介入プログラムを考案し（「ハームリダクション 2.0」）、実践する動きがヨーロッパ・北米、オセアニアを中心に活発化していた。訪問調査を行ったオランダ・ベルギー等では、従来の注射使用者介入モデルの他、ナイトライフモデル、ケムセックスモデル、ダークウェブを通じたサイバーアウトリーチ等の新しい形のハームリダクションプログラムが立ち上がっていた。同じ EU 加盟国でも、国によって、薬物政策や薬物使用者支援の方向性は異なり、今回の訪問地ではポーランド（ヘロイン使用の問題は EU 加盟国の中では小さく、大麻および覚醒剤の使用が多い）ではやや厳しめの政策を敷いていた。

5) 各国の状況については、以下の事柄があきらかになった。まず、日本では、HIV 分野の専門家間では、諸外国でハームリダクションの考えにもとづく介入プログラムが一定の効果を挙げていることは、1994 年第 10 回国際エイズ会議前後にはすでに知られていた。ハーム・リダクションを日本の薬物施策の状況と併せて検討する動きは、2010 年ごろから専門文献・記録物等が確認され、2016 年以降は、依存症の専門学会等でハームリダクションをテーマとしたシンポジウム、分科会が開催されるようになった。日本におけるハームリダクションについての言説は、「現実追認」「本末転倒」といった否定的なものから、「人間として当たり前の権利にかかわるものである」「個人レベルでならハーム・リダクションに近いことをやっている」といった肯定的なものまで多様であったが、日本の状況に合わせてハーム・リダクションを捉える「独自定義」、「覚せい剤の薬物療法は確立していないため、ハーム・リダクションはできない」のように、ハームリダクションを代替薬物による維持療法に限定してとらえる考え、「断薬より大切なものがある」など断薬との対比でハームリダクションを捉える考え方、「ハーム・リダクションは仲間やその他の人との「つながり」をつくる」など、ハームリダクシ

ンの効果を広く捉える考え方などが見られた。2018年から5年間の研究期間中、HIV分野の実践者・研究者とアルコール・薬物分野の実践者・研究者との間の連携の進展が見られた。また、アディクション医療の専門家が「ハームリダクション心理療法」を翻訳出版、学会シンポジウム等をして紹介する動きがあり、公衆衛生施策ではない形でのハームリダクション画策の方向性として注目された。

6) 訪問調査を行った韓国、台湾、カンボジアのうち、韓国では、日本と同様に、禁止主義的な薬物政策が採られており、医療および社会的ケアも断薬を基盤に提供されていた。韓国でのハームリダクションの実践は、HIV予防の文脈でMSM(男性と性行為をする男性)を主たる対象とするケムセックスモデルによる啓発プログラムが、当事者団体によって実施されていた。広域展開する規模ではなく、都市部に限定されているが、働きかけの対象(キーポピュレーション)を明確にした効果的な活動として評価されていた。台湾では、戦前からのアヘン問題を背景に、ハームリダクションの重要性が認識されていたが、HIV政策そして、LGBTムーブメントと合流して、東南・東アジア諸国にたいするモデルプログラムの実践を多く展開していた。カンボジアでは、2006年よりハームリダクションをHIV対策として導入している。カンボジアはHIV流行を効果的に行っている国の一つであるが、ハームリダクションを含む薬物使用者支援は、HIV対策としての位置付けを得ることによって、安定した資金を獲得しているとのことであった。訪問調査を行った国々の状況から、薬物使用者支援単体でのプログラムというより、クライアント中心的にニーズをとらえる複合型のモデルが、多く取り入れられていることが示唆された。

7) コロナ流行の影響下、研究計画の変更・再調整を行ったが、2018年度から2022年度までの間に、研究班(研究代表者1名、研究分担者1名、計2名)は6点の学術論文(うちオープンアクセス4件、査読あり論文3件、招待あり2件)、学会発表11件(うち国際学会3件、招待講演2件)、関連図書(翻訳書等)2件を、研究成果として発表することができた。ハームリダクションについての書籍執筆に着手したが、刊行まで至らなかったため、研究代表者・徐の後続科研の成果と統合する形での出版計画とする。2018年度に、アルコール・薬物医学国際学会にて、日本における薬物使用者支援についてのシンポジウムの企画を研究代表者・徐が行った他、2020年度の日本エイズ学会大会で、ハームリダクションをテーマにしたシンポジウムを企画した。2021年度は、日本精神・神経学会におけるハームリダクションをテーマにするシンポジウムにて研究成果を発表した。その他、研究代表者・研究分担者ともに専門商業誌への寄稿論文の発表、メディアへの取材協力を行った。これらの活動をとおして、当研究課題の目標のひとつ、依存症ケアや薬物対策へのオプションを増やすための社会的議論の活性化に尽力した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 池田 光穂、Ikeda Mitsuho、イケダ ミツホ	4. 巻 3
2. 論文標題 自然学論集：文化人類学の観点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Co*Design 特別号	6. 最初と最後の頁 1～573
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/83315	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 徐淑子	4. 巻 35(1)
2. 論文標題 鍵概念・ハームリダクション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本保健医療行動科学会雑誌	6. 最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 井上 大介、額田有美、池田光穂	4. 巻 1433
2. 論文標題 医療人類学からみたCOVID-19対策の現在：メキシコ、中米、パナマを中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ラテンアメリカ時報	6. 最初と最後の頁 58-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 徐淑子	4. 巻 35(1)
2. 論文標題 オランダにおける大麻政策とハームリダクション	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 27-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徐淑子	4. 巻 10(1)
2. 論文標題 諸外国における大麻合法化の動きと日本の薬物乱用防止教育：ヘルスコミュニケーションにおける「信頼」の問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徐淑子, 池田光穂	4. 巻 6
2. 論文標題 ハームリダクション:概念成立の背景と日本における語の定着について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CO* Design	6. 最初と最後の頁 51-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/73012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計11件(うち招待講演 2件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 徐淑子
2. 発表標題 ハームリダクションの概念と諸外国における成果
3. 学会等名 第117回日本精神神経学会学術総会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樽井正義, 生島嗣, 徐淑子, 山本大
2. 発表標題 ダルクにおける性的少数者およびHIV陽性者への薬物依存症回復支援の現状
3. 学会等名 第34回日本エイズ学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 徐淑子, 樽井正義
2. 発表標題 ハームリダクションの意義
3. 学会等名 第34回日本エイズ学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 徐淑子
2. 発表標題 オランダの大麻をめぐる政策の流れとハームリダクション
3. 学会等名 龍谷大学ATA-net研究センター犯罪学研究センター共催ティーチンシリーズ第2回「ハーム・リダクションとは何か? 非犯罪化、非刑罰化、非施設化のメリットとデメリット」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 徐淑子, 池田光穂
2. 発表標題 「しきいの低いサービス(low-threshold service)とは何か~ヨーロッパにおける薬物使用者らを対象とした社会的ケアの事例より~
3. 学会等名 第34回日本保健医療行動科学学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池田光穂, 徐淑子
2. 発表標題 ハームリダクション受容過程における日本化について
3. 学会等名 第45回日本保健医療社会学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 徐淑子
2. 発表標題 ハームリダクション：オランダにおける薬物問題と薬物使用者支援
3. 学会等名 シーボルト会研究会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ikeda M, Suh S
2. 発表標題 Introducing and Interpreting of Concepts of Harm Reduction in modern Japan
3. 学会等名 The 3rd Interinstitutional academic meeting in Toyonaka Campus Osaka University
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Suh, S
2. 発表標題 Symposium 16: Creative and Spontaneous: The Peer-Driven Social Care in East Asia
3. 学会等名 The 20th Annual Meeting of International Society of Addiction Medicine（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Suh, S, Ikeda M
2. 発表標題 How has the Concept of Harm Reduction been introduced and interpreted in Japan?
3. 学会等名 The 20th Annual Meeting of International Society of Addiction Medicine（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 徐淑子
2. 発表標題 大麻規制緩和時代の「ダメ。ゼッタイ。」とキャンパス・ヘルス, シンポジウム1「医療やケアのグローバル化に伴うコミュニケーションの問題をあぶり出す」
3. 学会等名 第10回日本ヘルスコミュニケーション学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 森淑江他編池田光穂他著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 南江堂	5. 総ページ数 260
3. 書名 国際看護：国際社会の中での看護の力を発揮するために	

1. 著者名 ウィリアムL・ホワイト、回復の顔と声・日本委員会（徐淑子他分担翻訳）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 社会評論社	5. 総ページ数 394
3. 書名 依存症から回復のコミュニティへ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ホーム・リダクションと薬物依存者への社会的ケア：ポータル https://navymule9.sakura.ne.jp/2018_SuhS_HarmReductionProject.html ホーム・リダクションと薬物依存者への社会的ケア https://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/2018_SuhS_HarmReductionProject.html 元薬物濫用者の社会的支援を考える http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/17_Action_anthropology101.html 麻薬＝絶対悪の《誤り》について http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/what_is_heroin_addiction.html 植民地時代の日本の麻薬政策 http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/17_colonial_morphine.html 阿片と台湾統治・関連年表 http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/17_Opium_in_Taiwan.html 臺北帝國大學醫學部ならびに醫學專門部（臺灣總督府醫學校）：歴史 http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/Medical_school_Taipei_Imperial_University.html</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	池田 光穂 (Ikeda Mitsuho) (40211718)	大阪大学・COデザインセンター・名誉教授 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関